

1年部” Where there is a will, there is a way.” より

10月も末か、11月になろうとしている今日この頃、2回目の進研記述模試も終わっていると思います。文化祭、ASIポスターセッションも終わり、秋も深まると同時にスポーツに学習に最適な季節となりました。

「雛鵬プラン」によれば、この時期は文理選択の決定がなされ、「主体性の熟成」の時期とされています。しかし、皆さんは文化祭やポスターセッションを通じて自ら動くことの重要性や、動かなければ周りが動かないことを体感したと思います。学習面だって同じですよね？模試や定期考査のやり直しをやらなければ、学力は動かない、向上しないでしょう。英単語テストをたかが…とないがしろにするのであれば、当然英語の力は少なくとも上昇することはないでしょう。人に言われてイヤイヤやることは自分の力にはなりません。人に言われなくてもスイスイとやるのが学力と人間力を向上させ、「主体性」を育み、自らを「熟成」させるのだと思います。

繰り返しになりますが、暑くも寒くもない、のびやかな気候になり、大きな行事も終わり、学習にはベストな時期ですよ。” We hope your effort will bear fruit.”

2年部より ~総合的な学習の時間 「小論文」に取り組んでいます。②~  
前号に引き続き、現在、総合的な学習の時間に行っている小論文の取組を紹介します。

☆進学・就職、あるいは将来いずれかの場面で役に立つのが「小論文」です。

前回は「作文」と「小論文」の違いについて紹介しましたが、今回は「小論文の書き方」についてです。

☆小論文を書くステップ

STEP 1 「設問を読み取る」～何を書けばよいのかをきちんとつかむ。～

・設問で何が求められているのかを読み取って、出題者の意図をつかむ。

STEP 2 「資料を読み取る」～筆者の意見を正確に読み取る。～

・小論文では、資料として文章が与えられることが多い。重要箇所(特に、筆者の意見とその理由)に注意しながら読むことが必要だ。

STEP 3 「意見を深め、固める」～疑問をぶつけて考えを洗い出す。「意見」と「理由」～

・様々な観点から、設問で問われていることや資料に書かれていることに対して疑問をぶつけてみる。その洗い出した材料の中から、何を書くかを絞り込み、「意見と理由」の形にまとめる。

STEP 4 「文章を構成する」～構想メモを作る。「序論・本論・結論」の形で書く。

STEP 5 「正しい表記で書く」 これから練習を重ね、小論文スキルを高めていきます。

3年部より 小論文入試のトレンド

文責 高木 直子

推薦入試などに向けて、小論文に取り組んでいる生徒も少なくありません。小論文対策研究会に参加した竹嶋先生の報告から一部を紹介します。

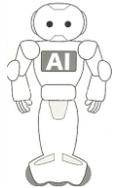
□ 小論文は「グローバル社会」について知らないと書けない。

➡高校生は「グローバル社会」についてポジティブなイメージを抱きがちだが、

**入試では主に「グローバル社会」のネガティブな面が問われる。**

グローバル化=ボーダーレスに世界が繋がるというだけでなく、そこに「激しい競争原理」が展開されるという意味が含まれている。

・グローバル社会を論じる時のキーワードは「格差社会」  
教育格差、医療格差、地域格差、世代間格差……

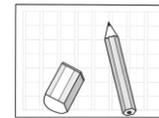


□ 格差社会を考える上での新しい視点=AIの進化

・AIの進化により人間の仕事が奪われる。➡仕事がある人とない人の格差  
・AIについて考えるときのキーワード

「ディープラーニング」:(AIが人間を超え始めた)

「産業用ロボットからサービスロボットへ」(対象がモノから人間へ)



□ 入試ではどのように出題されるか。

・AI搭載のロボットの活用が、人間の雇用にどう影響するか。  
・ロボットと人がどう共存するか。

AIと人が共存する糸口と考えられる記事を紹介します。ぜひ、ご一読ください。

(20170727 朝日新聞 論壇時評「人間と機械 AIが絶対にできないこと」歴史社会学者 小熊英二 一部抜粋)

AIについても其の方向で社会を委  
える試みがある。米マサチューセツ工  
科大教授のダニエル・ラスは、自動運転  
でトラック運転手の仕事をなくすより、  
運転手が疲労や睡魔に襲われた際の安全  
装備として自動運転を使う方が現実的だ  
と唱えた⑤。ドイツの労組は、政府  
や経済界と共同して、AI導入に備えた  
職業訓練制度を提起している⑥。

つまり問題はこうだ。AIそのものは  
新しい価値や成長を生み出すわけではない。  
イノベーションを起こすには、新しい  
価値や、社会制度の変革が必要だ。だ  
がそれは、人間にしかできない。  
「人間はAIに勝てるか」という問い  
がある。だが実は、人間は昔から機械に  
負けている。自動車より早く走れる人はい  
ない。しかしそのことで、「人間は自  
動車に負けた」と嘆く人はいない。それ  
は、自動車を人間の補助として使いこな  
せるように、社会のあり方を革新(イ  
ノベーション)したからだ。人間が機械に  
勝つとすれば、機械と競争することによ  
りではなく、機械と共存することによ  
り社会を革新することによってである。

